

Title	特集「子どもたちと他者：コミュニケーションの変貌と現代社会」によせて
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006.),p.1- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 子どもたちと他者：コミュニケーションの変貌と現代社会
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「子どもたちと他者

—コミュニケーションの変貌と現代社会」によせて

2005年度大会・シンポジウム企画担当 澤井 敦

本特集は、2005年7月9日に三田キャンパスにて開催された三田社会学会大会における同名のシンポジウムを基礎とし、当日ご報告いただいた古賀正義氏、小谷敏氏、櫻井龍彦氏、およびコメンテーターをおつとめいただいた鈴木智之氏に、当日の議論などをふまえてあらためてご執筆いただいた論稿から成るものである。

シンポジウムの企画にあたって、「趣旨」として、報告者・コメンテーターの皆さんに配布したのは以下のような文書であった（配布は2004年7月末におこなった）。どのような依頼のもとに報告がなされ、さらには論稿が書かれるにいたったのかという文脈を明らかにしておくという意味で、以下全文をそのまま引用しておく。

1990年代後半以降あいついだ少年による殺人事件や、近年の佐世保の小学生によるクラスメイト殺害事件など、子どもたちによる殺傷事件が世の注目を集めています。もちろん、こうした事件は、特異なケースであるわけですが、より一般的な次元で、いわゆる普通の子どもたちにおいても、他者に対する感覚や、公共的なものに対する感覚、また、コミュニケーションのありかたに関して、なにか危うい変化が生じつつあるという認識が共有されつつあるのではないのでしょうか。

本シンポジウムにおいては、子どもたち（この場合、「子ども」と言っても、未成年の者、つまり、小学校・中学校・高校の生徒、あるいは、大学への新入生までも含めた、ひろい意味での子どもを指します）の現在の状況、また、そのコミュニケーションの様相を対象とし、上記のような「なにか危うい」と感じられている変化について、さしあたりそれに対する価値判断は留保しつつ、さまざまな観点から考えることを趣旨としております。

このような変化は、もちろん、子どもだけの問題ではなく、むしろ、現代社会の構造的変動、また関係性の変容と連動しながら生起しているものでしょう。その意味でも、家族論、教育論、コミュニケーション論、また現代文化論、現代社会論といった多様な視角から議論が展開されれば、とても興味深い機会になるのではと思っております。

そして現時点（2006年5月）であらためて、シンポジウム・特集の趣旨に関して、企画担当者の立場からいくつか敷衍しておくことにしたい。

まず、近年のニート論などに関しても指摘されることであるが、子どもや若者に関する客観的な立場からのものとされる言説が、実は年長世代からの一定の評価を下敷きとするものであるということが時としてある。たとえば、そうした言説が、本来は制度や社会構造の側に帰されるべき問題を若年者の心理状況や生活態度の問題にすり替えて、批判の矛先をそらそうとする、ないしは醸成された不安感を解消しようとするものであるということがある。これについては、より一般的に言って、「いまどきの若者は～」といった年長世代から若年世代への批判は、それぞれの時代の状況におうじてこれまでも幾度となく繰り返されてきた、とみることもできるだろう。人々が、加齢とともに既存の体制の保持を望むようになるという傾向を有するが故に、体制を攪乱する要因を若年者という「見えやすい敵」のうちに見いだして安心しようとするということである。

いずれにしても、子どもや若者に関する言説が、以上のような「世代論的構図」のなかに組み込まれがちであること、あるいは、それが「世代間ギャップ」の様相を呈することがあることに、言説を生産するにしても分析するにしても、われわれは自覚的であるべきと思う。また、さらに言えば、時として、このような世代論的構図自体が、メディアをつうじて呈示される（たとえばある世代が「キレル世代」と名指される）ことによってひろく一般化するという再帰的な構造にもまた、われわれは自覚的であるべきだろう。

ただ、とはいえ、すべての事実をメディアが製造する、というわけではもちろんない。世代研究の領域で現在でも古典として位置づけられるカール・マンハイムの世代論においては、「世代連関」という概念が提起されていた。これは同じ時期に生まれた人々の集まりである「世代状態」（出生コーホートにあたる）ではなく、同じ世代状態に属しており、なおかつ特定の歴史的・社会的事象を「共通の運命」として体験し、それに刻印づけられた人々である。先に述べたように、子どもや若者に関する言説を世代論的構図に組み込まれたものとみるにしても、それらの言説の生成や受容の基底には、人々が日々の生活のなかで体験していること、家族や教育、労働や娯楽、コミュニケーションといったさまざまな場面で生起し人々が「共通の運命」として経験している変化がある。このような変化を、社会理論の用語を借りて、消費社会以降のポストモダン化、リスク社会化、個人化などの社会変容にともなう人々の関係性の変化と表現することもできる。そして、こうした変化はまた、インターネットやケータイに代表される新しいメディアの浸透と密接に連動しながら生起しているものである。

子どもや若者をめぐる言説をつうじて、われわれは、以上のような社会の構造的変動、あるいは関係性の変容をより具体的な現象から出発しつつ透視することができるだろう。そして、そうした営為は、特に子どもや若者に対象を限定するものではない、より一般的な現代社会の特質をめぐる議論へと接続していくはずのものである。

以下、各論文の内容に簡単にふれておきたい。各論文は、論じる対象は異なるものの、互いに交差しながら、子どもたちと「他者」の問題、あるいは子どもたちの「コミュニケーション」の変貌に孕まれる問題をそれぞれの視角から照射してくれている。

古賀論文では、子どもとメディアの関係をめぐる言説の現状をふまえたうえで、かとの関係をより

実証的かつ冷静に把握することが試みられている。少年犯罪へのインターネットの影響をめぐる議論に顕著であるように、一方で、メディアからの悪影響が年長世代から不安とともに漠然と語られ、しかし他方では、メディア・リテラシーを身につけた「小さな大人」としての子ども像が期待とともに語られるという現状がある。古賀論文では、『子ども生活実態基本調査』からえられたデータを基盤として、メディアの種類による差異、メディア接触の背景にある家庭・学校などの環境的要因の差異をふまえたうえで、一般論として語られがちであるメディアと子どもの関係の現状を、より繊細に描き出すことが試みられている。

小谷論文では、子どもをめぐる「問題」とされる事象を、先に述べたような世代論的構図のうちにおいて解釈することが試みられている。そうした「問題」が、年長世代の「ユースフォビア」の投影である可能性について、あるいは、新人類世代と新人類ジュニア世代の「世代間文化障壁のマルチダウン」を背景とするものであることなどが指摘されていく。これらの指摘は、さまざまな具体的事象を結び合わせながら、世代間の関係のありかたを論じることをつうじて、むしろ、その基底にあるわれわれの社会の変容の相貌を浮かび上がらせてくれる。そして論文の末尾で問題とされるのは、「子ども世代」ではなく、子ども世代に対峙する「年長世代」の姿勢である。

櫻井論文では、子どもたちのコミュニケーションの変貌が「ゴフマン的人間の没落」というコンセプトで特徴づけられる。近代化とともに成立する分節化された社会空間と、そのなかで状況に即して過剰なまでの演技わけを行う術を身につけた「ゴフマン的人間」は、近代の成熟にともなって、他者や社会をリアルに感じることなく、むしろ自己の「感覚」や内面にあるはずの「本当の私」に準拠する「演技過小」の「感覚派」や「心理派」の子どもたちにとって代わられる。この両者に共通しているのが、自分とは異質な他者にたいする感覚の欠如、「他者の不在」である。そして論文の末尾では、ここでもまた、子どもの「問題」をうみだす社会的背景の認識と、それをつうじての「大人の自己確認」の必要性について論じられる。

鈴木論文では、度々強調される子どもの犯罪の「わけのわからなさ」、「了解不能性」がいわば「共通理解」となり、その上で犯罪の原因を語り続けることに多くが費やされる現状に焦点が当てられる。そして、こうした子どもの「心の闇」を再生産するだけの原因探しは別として、むしろ注目すべきであるのは、人を殺すという「最後の一線」を越える行為の動機を了解可能なものへと整形していこうとする言語・文化的な過程それ自体が欠落している状況であるとされる。「佐世保同級生殺害事件」をめぐる報道言説や学生への問いかけと回答を素材としつつ、他者を理解するということについて繊細かつ慎重な考察が重ねられた上で、論文の末尾では、「動機の語り」をスキップしてしまうのではなく、「語ろうとして語りきれない他者」を確認すること、そこから開かれるコミュニケーションの可能性が展望される。

最後にあらためて、ご協力くださったシンポジウム参加者・執筆者の方々に感謝の意を表したい。企画担当の筆者にとって、準備期間やシンポジウム、特集編集をつうじての経験は端的におもしろいものであった。読者の方々にとっても、この「おもしろさ」が共有されるものであることを願うばかりである。

(さわい あつし 慶應義塾大学法学部)